

## 名古屋柳城短期大学における介護福祉実習のあゆみと課題

飯 盛 茂 子

## はじめに

名古屋柳城短期大学に専攻科介護福祉専攻（以後、『本学』という）ができて7年目を迎える。愛知県は介護福祉士養成校が全国的にみても多く、開設当時、本学は13校目、2004年度現在21校ある。そのうち専攻科は愛知県で3校目である。2年課程と違い、保育士の資格取得者に対し、1年間の修学で介護福祉士の資格取得ができる。介護福祉士の養成カリキュラムに即すことはもちろんであるが、本学の教育目標として大切にしている、対象者の捉え方や研究心を育てるために実習のあり方を考え、取り組んできた。学生定員数30名。本科と兼務する教務主任のほか専任教員2名である。専任教員2名で介護技術、形態別

介護技術、実習指導を担当する中、効果的に実習を行い、その中で講義内容をどのようにおさえていくか模索しながら過ぎた。

今回は、これまでの本学の介護福祉実習について振り返り、展望するための一資料となることを願い、ここにまとめることにしたものである。開設当時を振り返りながら本学における介護福祉実習のあゆみの記録と介護福祉実習の今後のあり方を検討する。また、特に学生の実習中の不安解消・教員との連携に役立っている介護専攻科のメーリングリストの活用について述べる。

## 1. 介護福祉実習の構成と実習時期

7年間の実習期間と時期について表にまとめた。

表 1 年間介護福祉実習時期

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1998 (平成 10) 年度				↔ I (2w)			↔ II (2w)				↔ III (4w)	
1999 (平成 11) 年度				↔ I (2w)			↔ II (2w)				↔ III (4w)	
2000 (平成 12) 年度				↔ I (2w)			↔ II (2.5w)	↔.....↔ 居宅			↔ III (3.5w)	
2001 (平成 13) 年度				↔ I (2w)			↔ II (2.5w)		↔.....↔ III (3.5w) 居宅			
2002 (平成 14) 年度		↔ I (2w)				↔ II (3w)		↔ III (3w)		↔.....↔ 居宅		
2003 (平成 15) 年度		↔ I (2w)				↔ II (3w)		↔ III (3w)		↔.....↔ 居宅		
2004 (平成 16) 年度		↔ I (2w)				↔ II (3w)		↔ III (3w)		↔.....↔ 居宅		

表 2-1 介護福祉実習時期詳細 (平成 10 年より 11 年)

第 I 段階	第 II 段階	第 III 段階
H10/7 月中 2 週間 (90 時間)	10 月後半 2 週間 (90 時間)	1 月中～2 月上 4 週間 (180 時間)
H11/7 月中 2 週間 (90 時間)	10 月後半 2 週間 (90 時間)	1 月中～2 月上 4 週間 (180 時間)

表 2-2 (平成 12 年&lt;カリキュラム改正&gt;より現在まで)

第 I 段階	第 II 段階	第 III 段階	居 宅
H12/7 月中 2 週間 (90 時間)	10 月後半/2.5 週間 (110 時間)	1 月中～2 月上/3.5 週間 (170 時間)	11 月中～12 月中 2 日/1 人 (16 時間)
H13/7 月中 2 週間 (90 時間)	10 月後半/2.5 週間 (110 時間)	1 月後半/3.5 週間 (170 時間)	1 月中 2 日/1 人 (16 時間)
H14/6 月下 2 週間 (90 時間)	9 月中～10 月上 3 週間 (135 時間)	11 月下～12 月中 3 週間 (135 時間)	1 月中 2 日/1 人 (16 時間)
H15/6 月中 2 週間 (90 時間)	9 月下～10 月中 3 週間 (135 時間)	12 月前半/3 週間 (135 時間)	1 月中 2 日/1 人 (16 時間)
H16/6 月下 2 週間 (90 時間)	9 月下～10 月中 3 週間 (135 時間)	11 月下～12 月中 3 週間 (135 時間)	1 月中 2 日/1 人 (16 時間)

\* 上、中、下は上旬、中旬、下旬と月を約 10 日間で区切り表記した。

## 2. 本学の介護福祉専攻の教育目的・目標

### 〈教育目的〉

建学の精神を基本として、豊かな人間性を培い、介護を要する人々に適切なサービスが提供できる人材の育成を目的としている。

### 〈教育目標〉

1. 生活者としての人間および人間の尊厳について深く理解させる
2. 生活の向上を目指し、介護（生活を整えるため）に必要な基礎的能力を養う
3. 介護の専門性を追求し、常に自己啓発する能力を養う

## 3. 本学の特色と実習目標との関連

- 1) 本学の学生は保育士資格があり、幼稚園・保育園・児童施設他、福祉施設への実習を終えてきている。1 年目の学生の実習を通し、これらの経験を生かし、入所者へのレクリエーションや施設の壁面を飾ったり、演奏会を催したりすることがスムーズに導入できることがわかった。そのため、意識して施設におけるレクリエーション計画に加わったり、振返りができるよう目標に取り入れた。
- 2) 保育における計画は個人というより、担当クラス全体への取り組みが中心のようだが、介護における計画は個人への具体的なプランである。そのため記録の書き方に違いがあるように感じた。保育科との記録の方法やプランの立て方の違いに戸惑う学生が多かった。日々の日誌の中では援助項目一つ一つに対し、方法論と感想が書かれた。そして、日々の目標に対する考察が

書かれていなかった。そのため、意識的に日誌に本日の目標、次回の課題という欄を設けた。また、授業内の演習にも実習記録の用紙を使用し、テキストに戻って考察することを指導してきた。しかし、現在においても、まだ、記録のあり方に関しては課題を残している。

- 3) 表 1、2 からわかるように、開設当初より 2 年間は 2 週、2 週、4 週という実習期間で、最後の 4 週目は年明けに実施していた。初年度の実習を通し、実習施設や学生の反応から第 III 段階の実習時期を年内に実施したいと考えた。それは、就職に向けて、全施設を実習した後で決定したいと考える学生が多い中、年明けでは就職につながらない、という現実がある。また、実習を受け入れる施設からも、就職が決まてからの実習意義を問われたこともあった。このような経緯から、できる限り早い段階に時期をずらしていきたいと考えた。しかし、愛知県の介護福祉施設実習は調整会議において、2 年後の実習時期及び実習施設が決定した。すぐに対応しよう考えたが 2001 年の 4 年目からの導入となった。また、2000 年よりカリキュラム改正で居宅実習が位置づけられ、年明けに居宅実習を組み入れていくことになった。
- 4) 1 年課程での実習は 360 時間、2 年課程の 450 時間より 2 週間の実習期間の短縮、その上、カリキュラムの中で求められている到達度は同じである。特に本学の第 II 段階における実習目標は他職種業務の理解、日常生活援助の実践、レクリエーション計画である。2 週間という実習期間では目標到達が困難と考え、徐々に II 段階実習へ III 段階実習の時間数を移動した。

また、Ⅲ 段階では夜勤実習と介護過程の展開が目標であるが、時間数を減らしてきたことより、夜勤実習で 2 日間、日中の実践時間を失うことは大きいようであった。2002 年度の実習状況をみると、計画はするものの、実践し、評価をするというプロセスが完結しにくかった。ただ、介護過程の展開をする利用者の夜間の様子を知ったり、夜勤実習に知り得た、その利用者の情報を活用できることを考えると夜勤実習内容は介護過程の展開に活かされる部分も大きかった。しかし、夜勤実習は夜間の利用者の様子、業務の内容を知る。という目標に徹し、介護過程の展開に夜間の利用者の様子を自分の目で確認する必要がある場合は、必要に応じて観察をさせていただくという方向で、2003 年度より、思い切って夜勤実習をⅡ 段階へ移動した。

5)

#### <訪問介護実習目的>

1. 居宅における生活を支えるためのサービス内容について学ぶ
2. 居宅における介護技術、住環境の知識や福祉用具の活用能力を高める

#### <訪問介護実習目標>

1. 居宅で介護を受けている利用者を知る
2. 居宅介護における介護技術・介護職の役割について学ぶ
3. 居宅介護サービスについて学ぶ
4. 保健・医療など他職種との連携を知る

訪問介護実習は 2000 年より、本学では 1 人が 2.5 日間の実習を行っている。実習契約事業所は 3～4 施設で、在籍する学生の人数に応じて依頼をしている。実習前には、実習先の事業所にグルー

プに分かれて事前訪問に伺い、各事業所の特徴や留意点などについてオリエンテーションを受けている。その後、1 日あたり 1 人から 2 人の学生が同行訪問の実習を行っている。2 日間の簡易なスケジュールとしては表 3 の通りである。

本学の訪問介護実習の内容は、1 日目と 2 日目と同じ利用者が 1 人は、いるように同行訪問を依頼している。その中で対象となる利用者がどのようなサービスを利用しながら居宅における生活をしているかを理解する。実習している事業所のほかにどのようなサービスを利用しているのか。それらのサービスとの連携のあり方や、それを活かした訪問介護内容であることを理解することに重点をおいている。そのために 2 日間の実習は、続けた日程ではなく流動的である。多くは同じ曜日に実習に出られるように事業所に依頼し、実習している。

実践内容としては 1 日目には同行訪問をしながら、訪問介護のあり方を知る。そして、午後にステーションで利用者の受けているサービスを記録から読み取り整理する。1 人の利用者につき具体的な援助内容やなぜその内容を提供するのか。提供理由や根拠を整理する。2 日目は 1 日目の実践方法を見学しているため、整理した情報と照合しながら可能な範囲で実践する。

#### 4. 実習施設の変遷

初年度、実習施設の契約にあたり、指導できる職員がいなかったところが多かった。介護福祉士養成校の実習施設は、施設が設立後 3 年経過していることのほかに、看護師もしくは介護福祉士の資格を有していて、現場における経験が 5 年以上ある職員がいないと実習施設として認められない。そのため契約できない施設もあった。施設側もその

表 3 訪問介護実習スケジュール

	実習場所	午 前	午 後
1 日目	午前：居宅訪問先 午後：居宅介護事業所	居宅同行訪問 (2～3 件) 見学中心	情報収集、記録 (日誌、居宅実習記録①②)、指導者を交えてのカンファレンス
2 日目	午前：居宅訪問先 午後：居宅介護事業所	居宅同行訪問 (2～3 件) 1 日目と同内容の援助内容は可能であれば実践する	記録 (日誌、居宅実習記録①②補足と考察、評価表)、実習のまとめ

\* 事前に半日、居宅介護事業所の見学及び「訪問介護の留意点」についてオリエンテーションを受ける

点を理解されていないところもあった。現場経験の年数は長いが資格を持たない職員、資格を所有していても経験年数の少ない職員、まだ、介護福祉士の歴史が浅いだけに要件としては厳しいものがあった。しかし、現在では施設としての設立年数が3年ということクリアしている施設のほとんどは、指導者要件を満たす職員がいる。それだけ、施設としての有資格者の配置は充実してきているものと思われる。

また、開設当初は国家試験を受験して、介護福祉士の資格を取得された職員が多かった。そのため、技術はすばやく提供されていたが、多くの指導職員は実習経験が少なく、学生の実習目標を受け入れていただくことに困難を要した。

- ① 実習時間が1時間でも足りないと言われ、全実習時間より差し引いて訂正された時間数を記載される。
- ② 記録時間の意義が認められず、実習時間内で設けられない。
- ③ フロアーの担当者に学生の実施場面を監督していただき、アドバイスがほしいことを伝えても学生が1人で実施せざるを得ない状況が多い。
- ④ 教員が巡回しても学生の実施場面に入れないどころか、フロアーそのものに足を踏み入れることが許されない実習施設があった。

他にも、学生の実習指導をしていくために困難を感じた部分はあるが、上記の点については介護福祉実習の指導をする上で大きな壁となった。しかし、現在は介護福祉士養成校を卒業して、実習経験のある職員が増えたこともあり、徐々に理解されやすくなってきていると感じる。

## 5. 実習巡回

実習の巡回では各施設に週2回は巡回にあたり、指導をするよう厚生労働省からの通達がある。開設当初は実習調整の関係から遠方に実習に行かざるを得なかった。県外5施設。市外3施設。市内3施設。実習施設の往復に4時間、そして、現場で1時間しか学生と関われないというような状況の中で、十分な指導をすることは困難であった。本学のように学生定数の少ない大学でさえ、1人の教員が5～6施設担当することは通常である。

多くを巡回できて1日2施設、朝から夜までかかることがほとんどであった。その後、新施設を契約し徐々に市内で実習ができるようになった。最近では市内の施設で実習できることもあり、1ヶ所1時間30分ほどの往復で、施設内において学生とカンファレンスを持つ時間にゆとりが持てるようになった。

前述の4.でも述べたが、実習施設への教員巡回についても、あまり好意的に思われない施設も多く、それほど頻繁にこななくて良い、業務が寸断する、という声も聞かれていた。しかし、施設職員の有資格者数の変化や介護保険導入のためか、施設も介護福祉士養成校から施設に対する評価を聞いて、業務改善を図りたいというところが出てきた。

巡回での指導内容<sup>注1)</sup>は、本学の各段階の目標に対し到達度や学生の不安を解消するべく面接や方法論のアドバイスをしている。

## 6. メーリングリスト

学生の不安解消・連絡に利用しているメーリングリストの活用について述べる。時代の流れの中、2001年には本学の学生の携帯電話保有率が高まった(表4)。表から見てもわかるように2002年には本学の学生全員が携帯電話を所持し、メールを活用していた。そのため、2002年度より介護専攻の学生全員と教員のメーリングリストを作った。一人が発信すると、クラス全員に知らされる。教員からの連絡も発信しやすくなり、特に実習中には実習内容や不安内容がメーリングリストに上がった。すると、自分もそうだとか、こんな工夫は？

表4 携帯電話活用率

入学年度	携帯電話 (PHS含む)保有率	PC・携帯メール 活用率
1998(平成10)年度	52%	0%
1999(平成11)年度	84%	0%
2000(平成12)年度	100%	6%
2001(平成13)年度	100%	90%
2002(平成14)年度	100%	100%
2003(平成15)年度	100%	100%
2004(平成16)年度	100%	100%

と学生同士の情報交換が深まった。教員としても学生の戸惑いを感じつつ、早急に巡回が必要なところを選択し、実習施設に連絡を入れたりと対応がすばやくできるようになった。メーリングリストを活用する前は、巡回時に自分のことより他の施設で実習している学生の様子をまず知りたい、という反応であった学生が、メーリングリストを利用してからは情報をいかして次のステップに進んでいることがあった。

実習における注意点としては、施設で携帯電話の充電をしないこと、施設に到着時点で電源を切ることなどをあげた。1 日の実習開始前には自分や他者への激励メール、実習終了後には、その日の様子などが流れた。

また、教員の連絡もスムーズに伝わった。実習の終了時間が遅かったり、遠方の学生は学校への立ち寄りもできないことより、業務連絡、就職情報など時間に余裕の持てる連絡には十分に活用できた。悪天候時の対応では各施設に連絡を入れるとともに学生の帰宅確認などがスムーズにできた。

表 5-1 2002 年度 入学生のメーリングリスト活用状況

年\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2004	<u>1</u>			<u>1</u>	<u>2</u>	<u>1</u>		<u>3</u>				
2003	<u>17</u>	<u>8</u>	<u>10</u>	<u>7</u>	<u>4</u>		<u>2</u>			<u>2</u>	<u>3</u>	
2002						<u>2</u>	<u>62</u>	<u>8</u>	<u>8</u>	<u>23</u>	<u>5</u>	<u>23</u>

表 5-2 2003 年度 入学生のメーリングリスト活用状況

年\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2004	<u>24</u>	<u>21</u>	<u>27</u>	<u>19</u>	<u>11</u>	<u>2</u>	<u>6</u>	<u>5</u>	<u>2</u>			
2003				<u>15</u>	<u>4</u>	<u>60</u>	<u>13</u>	<u>9</u>	<u>18</u>	<u>29</u>	<u>24</u>	<u>18</u>

表 5-3 2004 年度 入学生のメーリングリスト活用状況

年\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2004				<u>14</u>	<u>11</u>	<u>5</u>	<u>9</u>	<u>11</u>	<u>29</u>			

## 7. 考察

### 1) 介護福祉実習の期間と時期

現在は 6 月に 2 週間、9 月後半から 10 月にかけて 3 週間、11 月後半から 12 月にかけて 3 週間という日程で実習時期としては落ち着いてきた。できればⅡ段階とⅢ段階の間にもう少し期間を

持ちたいが、愛知県の実習調整の関係より困難を要している。この期間で、学生は介護過程の展開方法を学習するので十分な時間を確保したい。しかしながら、現状では実習時期の移動も困難であるので、その期間に介護過程の講義時間の補講などを行っている。

本学の学生は保育士資格も有していることから保育か介護か進路を迷う学生も多い。Ⅰ段階の実習だけでは雰囲気を理解する程度であり、実践までできない中で、自信を持つことも難しいようである。開設当初に比べ、年内に施設実習を終了できるようになったことから、学生の就職への選択肢は広がった。Ⅱ段階・Ⅲ段階の実習を終えてから、介護における充実感や職業としての介護についても考慮したうえで、選択できるという学生が増えてきたことから 1 年課程では年内に施設実習を修了することは有効と考える。

訪問介護実習については厚生労働省よりⅡ段階後の実習が好ましいということであるが、ただでさえⅡ段階とⅢ段階の実習の間が短いことから組み入れることは困難と考える。養成校によっては居宅サービス事業所を併設している施設における実習で、同時に居宅実習内容を組み入れているところもある。だが、3-5) で述べたように、居宅における技術展開より、利用者を取りまくサービス理解を中心の実習目標としている本学としては、施設実習と切り離すことで訪問介護実習の利点を見出したいと考え、年が明けてから実施している。前述の就職における選択肢との関連から考えると何事も早く取り入れたいが、訪問介護を受ける対象者の理解としてはデイサービスを実施している施設実習の中で、居宅で生活している利用者と触れ合ったり、送迎に参加させていただき、認知を促している。

### 2) 訪問介護実習

訪問介護実習の内容については 3-5) で述べてきたが、導入後 4 年目になる。訪問介護実習に関しては実習調整がない。本学が契約している事業所と連携をとりながら実習をするという点では 3 年間積み上げてきて、内容的にも理解を得られている。しかし、入所施設以上に利用者の実習承諾をいただくことが困難である。そのため、契約

数が少ないと長期間にわたり学生を実習に出すことになる。現在のところ、2-3の事業所に実習に出ているが、1ヶ月ほどかかる。時には利用者がいない時もあり、日程をずらすと期間的に延長する。講義の欠席との関係より今後は訪問介護実習のできる事業所の契約を進め、2週間で実習できるようになるため、本学の訪問介護実習内容を受け入れてくださる5-6の事業所と契約したいと考える。また、多くの利用者と接することは限られており、学生が実習で同行させていただく利用者は了解の得られている、受け入れのよい対象者といえる。学生にはその点も十分に伝え、その中で学生の実習姿勢が、事業所と利用者との関係にも影響を与えることを伝えている。利用者と事業所の契約関係であることは学生の実習受け入れに関して事業所にもストレスのかかる内容である。訪問介護実習を通し、利用者中心の介護という点でも学生が深く考える機会となっているようである。施設実習でも本来は同様であるが、訪問介護実習で学生は、より利用者の尊厳について理解を深めている。そのため、現在は2日間の実習期間であるが日数的にも増やしていくことを考えたい。その中で利用者を支える家族への視点を深めることが課題と考える。

### 3) 実習施設との連携

本学では介護技術・形態別介護技術の演習内容を具体的な技術習得ということよりも思考過程を大切にして教育内容を考えてきた。であるから、おむつ交換・入浴介助・食事介助など、手順よりも根拠を考えられるよう、また、自分の考えを伝えられることを中心に授業内容を組み立ててきた。技術提供方法は施設によりさまざまであり、職についてから獲得できる。しかし、なぜ、その方法で行うのか、この方法がベストであるのか、と疑問に思い考える姿勢を学生時代は大切にしていきたいと考えた。学生にとっては実習に行くとは他校の学生よりテクニク的に未熟であり、不安も多いようだ。しかし、正味10ヶ月という短期間での目標を、思考過程に重点をおき、講義で技術の根拠を、実習施設では利用者に応じて提供されている技術のあり方を探る、ということで記録内容を大切に指導してきた。だが、4.でも述べたよ

うに、現在の実習時間は学生が記録などに充分時間をかける時間数になっていない。実習施設においては、学生にできる限りいろいろな場面を見学・実施させてあげたいという思いが強く、実習時間が短いと受け入れてもらえない施設もある。また、どのように学生に情報提供をすべきか、連携の薄い部分もある。だが、この7年の経過を見てみると施設も変化してきている。介護保険の導入や介護福祉士教育の充実も要因になっていると思われる。また、看護教育に高齢者施設の实習が組み入れられ、看護実習を受け入れている実習施設は介護実習への姿勢に大きく変化が見られたことから、これらの要因も大きいと考える。看護教育も長い年月をかけて体得する教育から科学的視点の必要性が問われ、教育内容が変化してきた。介護教育においては看護教育より短い期間での到達が望まれる。そのためにも、施設と連携をとれる実習の重要性を感じる。

看護教育では多くの教育機関が付属の実習施設を持っており、実習施設の教育のあり方と教育機関との連携がとりやすい。しかしながら、介護の養成校の多くはそのような連携をとれる施設を実習施設として持つところは少なく、教育機関の実習目標や内容などを伝え、理解していただくことが困難である。一番ヶ瀬<sup>1)</sup>は「医学が進歩した理由を考えると、そこには附属病院があった。看護師も附属病院で実習を行っている。介護福祉士の力量を上げるためには、養成校附属の施設が必要なのではないだろうか。」と述べている。愛知県においては実習調整（同時期に重複している契約施設を学校間で調整する）を行った施設で実習をすることになり、たくさんの施設との契約をする必要があり、年度ごとで実習施設が変化する。そのため、教育機関の実習目標や内容など、ますます連携がとりにくい環境といえる。連携とは教育機関からの要望のみでなく、施設職員の教育、介護福祉士全体の卒後教育にも関連すると考える。学生とともに現場における問題点を教員もまじえ考えたり、新しい情報を提供できるなど施設側の提案に教育機関が答えていくことも大切である。だが、現在のような年度により実習施設が入れ替わる状況であると積み重ねが困難である。また、一番ヶ瀬は附属の施設が困難であれば、養成校と地

域の諸施設と強い繋がりを結ぶことの大切さ、に言い換えている。同様に、実習を重ねるたびに施設との連携の必要性を感じる。本学では、開設後、継続して実習できている実習施設が1つだけある。そこでは本学の実習目標に理解を示し、ともに育ち、介護福祉士のレベルを上げていこうという姿勢が示された。このように学生にとって実習しやすい環境。また、施設にとっても有益になる環境になるために連携を密にしていくことが重要であると考え。連携しながらの取り組みについては今後、整理して報告したい。

#### 4) メーリングリスト

学生への連絡のためにつくりはじめたメーリングリストであったが、以外にも実習中など学生同士の交流が少なくなっている時期には、より活用されている。表5は登録開始年度から現在までの利用状況であるが、2002年度は登録時期が遅く、実習開始寸前であり、6月の利用は2件と少ないが、7月の実習終了時期にはたくさん活用されている。また、10月後半からは実習が続く時期であり活用件数としても多くなっている。この表だけでは内容の分析をしていないため大まかなことしかいえない。そのため、今後は内容について少し分析していきたいと考える。

また、本学の場合は定員数が少ないということも活用の上では大きなメリットである。現在は教員サイドでメーリングリストを管理している。登録に対応する時間、また、アドレス変更への対応等、時には管理者が配信状況をチェックしないと確実に配信されているかわからないという問題もある。このメーリングリストは在学中だけと考え作成したものだが、卒業時に学生から残してほしいといわれてそのままにしている。表5-1・2のように卒業後も時々使用されている。また、就職当初は職場での状況も流れている。継続性を活用して、教員からも講演会の内容、学校行事の案内など送ることもある。そして、その機会を期に数名の学生からの活用が見られたりする。このような状況を見てみると利用方法によっては卒後の連絡だけではなく、卒後教育的な内容に活用できないかとも考える。そのため、前述の内容分析に合わせ、管理者の問題・卒後教育内容についても今

後の検討課題と考える。

学生は不安があると次への課題に臆病になる。一つ一つの不安材料を早い段階で解決できることをしていくことが効果的に実習を進める上で大切である。また、メールの内容を読んで学生の問題ではないことに学生自身が気づかず悩んでいることもある。学生は不安を持ちながらも実習に臨み、その中で起こった物事を肯定的に受け止められる学生とそうでない学生がいる。学生が建設的に問題解決できるよう支援していくことが大切である。それらの内容にも教員がすばやく対応できることから、メーリングリストは現在のところ効果がみられている。今後は上記の課題を整理しながら活用を進めていきたい。

#### 5) これからの介護福祉実習

現在、実習施設は介護福祉施設と老人保健施設がほとんどである。身体障害者の施設は数も少なく全学生が実習することは難しい。そのため、現在は実習とは別に見学実習を取り入れている。しかし、介護職の対象者が広がり精神障害についての理解も深める必要が出てきた。精神障害者施設は実習施設として認められていないが、これから地域でいろいろな介護を必要とする対象者と伴に生活していく時、地域の人々に理解を促せる人として介護福祉士の役割も大きいと考える。介護福祉士の対象者が広がり、求められる質の高さを考えると福祉系短期大学卒業であっても1年間の履修期間では課題が多すぎる。卒後教育というよりは学生の間に、人との交わりの中で学生自身が成長できる時間とゆとりが必要である。現状では困難も多いが、本学の教育目標に近づけるよう、方法論ではなく、根拠・事実を見つめられる、教育内容を考えている。技術的(テクニク)な課題が十分に達成できないということはあるが、その点こそ、卒後に職場で身に付けさせていただくことをお願いして、1年間での教育内容を考え実習に取り入れたい。その上で本学が、卒後教育としてどのように関わっていくべきか、卒後教育というよりは生涯学習としての教育課題の必要性が問われている中、養成校間の横のつながりも大切にしながら実習のあり方を検討していきたい。

## おわりに

本学に介護福祉専攻が開設して7年が過ぎようとしている。実習時期、各実習期間、実習の目標を見直しながら過ぎた。その間、介護保険の導入、カリキュラムの改正などがあり、介護福祉士の役割にも変化がみられている。その中で修業年数1年の介護福祉士養成の専攻科で、どのように学生を育てていくかを模索している。

学生は実習からの学びが大きい。その実習を効果的に行うために、学生の不安を取り除いて目標に向えるよう支援することも教員の役割として大きく、介護専攻におけるメーリングリストの活用は不安解消という点で役立っているようだ。

また、今後の介護実習における課題としては、養成校と実習施設の連携、養成校間の横のつながりが大切になる。施設職員と共に学び、共に育つ、そして利用者にとっても介護職にとっても、より良い介護福祉施設になり、介護を学習した卒業生が生き生きと働き、後輩を育てることが望まれる。そのためにも、連携をとりながら実習のあり方を考える必要がある。

## 【注】

- (1) 飯盛茂子『介護福祉専攻における介護福祉実習についての一考察』「名古屋柳城短期大学紀要」No. 21. 1999. p185.

## 【文献】

- 1) 一番ヶ瀬康子『これからの期待も含めて』「介護福祉教育」No. 11. 2000. p.10.
- 2) 宮堀真澄 鈴木圭子『学生の介護福祉実習に対する認識と不安と認知その対処』「介護福祉教育」No. 10. 2000. p.p.22-p.p.27
- 3) 吉田宏岳「介護福祉教育の歴史と新時代への課題」『月刊 総合ケア』Vol.13 (6). 2003
- 4) 野尻京子『介護実習経過と今後の課題』岡崎女子短期大学研究紀要 (37) 2003.
- 5) 武藤久枝；平松夕奈『介護実習の早期実施に関する有効性の検討』岡崎女子短期大学研究紀要 (37) 2003
- 6) 飯盛茂子『介護福祉専攻における介護福祉実習についての一考察』名古屋柳城短期大学研究紀要 (21) 1999



## A Reflection on the History and Issues for the Future of the Practical Training Course for Certified Care Workers at Ryujo College

Iimori, Shigeko\*

名古屋柳城短期大学に専攻科介護福祉専攻ができて7年目を迎える。愛知県は介護福祉士養成校が全国的にみても多く、開設当時、本学は13校目、2004年度現在21校ある。そのうち専攻科としては愛知県で3校目である。介護福祉士の養成カリキュラムに即すことはもちろんであるが、本学の教育目標として大切にしている、対象者の捉え方や研究心を育てるために実習のあり方を考え、取り組んできた。

開設当時を振り返りながら本学における介護福祉実習のあゆみを報告するとともに、介護福祉実習の今後のあり方を検討した。専攻科開設後、介護保険の導入、介護福祉士養成カリキュラムの改正などがあり、介護福祉士の役割にも変化がみられ、毎年実習目標を見直してきた。また、実習を効果的に行うために、いかに学生の不安を取り除いて目標に向えるよう支援できるか。1つの取り組みとして介護福祉専攻におけるメーリングリストの活用状況を述べる。そして今後の課題として、養成校と実習施設の連携、養成校間の横のつながりについて考察した。

キーワード：介護専攻、介護実習、メーリングリスト、実習不安